

十月三十一日。

ハロウィンである。

収穫を祝い、魔を祓う、海外の宗教的な行事が、なぜか仮装して家々を訪ね、お菓子を要求する風習に変わった。日本でも認識はされていたが、実際に仮装して街を練り歩くようになったのは、ここ数年の事で、何がきっかけだったのかはよく判らない。

ただ、ハロウィンに宗教的な由来がある事は変わらない。

なんでも、煉獄にいた魂が、天国に行ける日なんだとか。

そんな日であれば、ひよっこり地上にやってくるもの好きもいるかもしれない。夜の街にオバケやモンスターに扮した人間が溢れば、中に本物が混じっていても誰も気付かないだろう。

そして、賑やかさに惹かれて現れるのは、そういった者だけとは限らない。

9 戦目

『お菓子の代わりに』

俺の名前は 橘 アサト。ゾイエス学園高等部の三年生だ。

このフレーズを使うのも久々な気がするが、今日は構成上、この日常学園ラブコメのテンプレ導入じみたフレーズを使わざるを得ない。なにせ一人だ。誰も俺の名前を呼ばない以上、自分で名乗らなければ俺が誰か判らない。これが一人称小説の厄介なところだが、逆に言えば『俺の名前は——』というフレーズで済ませられるという事でもあるので、それはそれで楽なのかもしれない——作者が。

まあ、とりあえずそんなメタな事はどうでもいい。

むしろ、それどころではない。

目の前にいる見知った姿の相手から、『お前は誰だ？』と問われているのだ。無言のプレッシャー

庄 も半端じゃやない。下手な動きを見せれば、次の瞬間には予測も出来ないような方法で殺されそうな気さえする。

「——」

紅い瞳がじつと俺を見つめる。本当に俺の事を知らないのだろう。知らない人間に名前を呼ばれて警戒する——それはつまり、そうせざるを得ない環境で生きてきた可能性が高い。少なくとも、詐欺師や勧誘員、変質者に向けるレベルの警戒ではない。明らかに『敵』を警戒する気配を放っている。それでいて怯える様子は微塵もなく、むしろ落ち着き払っており、その手の修羅場を何度も潜り抜けてきた風格すら感じる。

いつまでも気圧されている訳にもいかず、俺はとにかく思った事を口にした。

「……………ヤミヒメ、じゃないんだよね？」

そう。俺の目の前にいる見知った姿の少女は、流遠ヤミヒメそのものとしか思えなかったのだ。

ほんの十分ほど前、俺は家を出て、同居人である少女達が働いている——賃金が払われていない以上、この表現は不適切かもしれないが——とある店を目指していた。今夜はハロウィンという事で、夜も営業をするらしい。

その道すがら——彼女とすれ違った。

魔女のような、黒いつば広のトンがり帽子とマントを着用していたが、それで気付かぬはずもない。俺は無言で通り過ぎようとしたヤミヒメに声をかけたのだが、返ってきたのは警戒の眼差しだった。

「いいや、ヤミヒメというのは私の名だ」

ヤミヒメのそっくりさんが答えた。堂々とした佇まいに、やはり本人なのではと考えそうになるが——違っ。確かに、見た目も声も雰囲気も、俺の知る流遠ヤミヒメと変わらない。なのに、違っくと判ってしまう。

「だが、この世界の住人が私を知るはずがない。それにも関わらず、お前は私の名前を知っている——」

ヤミヒメのそっくりさんが淡々と言う。淡々とした口調のはずなのに、しかしそれは、まるで物語を語って聞かせる吟遊詩人のようで、心地良くさえ聞こえた。

「故に興味が湧いた。お前の知る私はどういった人物だ。お前とはどういう関係なのだ？」
「……すまん。なんとなくだが、あんたの言ってる事は判る。けど、本当になんとかんで、正直、混乱してる」

なぜか、なんとなくだが、状況が理解出来てしまっていた。目の前にいるヤミヒメのそっくりさんは、恐らく別の世界から来た。そして、俺の住んでいるこの世界にも、ヤミヒメという名前の人物がいるのだと確信している。だから、その人物の関係者であろう俺に興味を持った。

突拍子もない話だ。常識で考えれば、ヤミヒメが悪ふざけをしていると思うのが普通だろう。

だが違う。目の前の少女が、俺の知る流遠ヤミヒメとは別人だと確信が持てる。

しかし、その理由が判らず混乱していた。無理矢理理解させられているようで、多少、頭が痛い。

「ふむ。道理だな」

俺の心境を理解してくれたのか、ヤミヒメのそっくりさんは右手をゆつくりと掲げ、俺の頬に触れた。温かく柔らかな感触。

「どうだ？ 落ち着いたか？」

心配してくれたのか、身長差から俺を見上げる格好になった彼女の視線には、もう警戒の色はなくなっていた。

瞳の色こそ違うが、長い黒髪と整った容貌、抜群の体型は間違いなく見知った幼馴染のもので、それが間近で俺を心配そうに——それは言い過ぎた、訂正する——見上げる光景は、なかなかグツとくるものがある。

「……ん？」

「あ、ああ。大丈夫、もう落ち着いた」

心なしか不安げに小首を傾げる様子に、ときめいたりはしていない。していないのだ。

「えっと……ヤミヒメ——あ、俺の知ってる方な。そのヤミヒメはあんたとそっくりで、この世界では普通の学生をしている。学生って判るか？」

「肯定だ。私の世界にも、そういったシステムは存在する」

「そうか。俺はそのヤミヒメとは幼馴染で、同じ学校に通ってる」

「それだけか？」

ヤミヒメ——そっくりさんの方——が問う。

「他に……あー、妹が二人いるぞ。あと、妹みたいなのが別に二人いるが、一人とは最近仲が悪いというか、いや、別に険悪とかじゃないんだが」

どういった人物かと訊かれると、説明に困る。そっくりだと言った手前、変に容姿を褒めるのも口説いているようで気が引けるし、この日本という平和な国で暮らすただの学生に過ぎない以上、特に言うべき事も思いつかない。

「——ふむ、なるほどな」

だが、意外にも彼女は、俺の回答で納得してくれたいらしい。変わらず表情は乏しいが——タオエンに近い雰囲気だが微妙に違う——どこか満足げに見える。

「驚かせてしまい、すまなかったな。——ああ、この事は他言無用だ。強制はしないが」
「言っても誰も信じないだろ」

何か彼女が不利益を被る訳ではなく、それがお互いのためなのだろう。そういう事も判ってしまう。

「ん。良い心がけだ」

「何処に行くんだ？」

彼女が俺に背を向けた事で、これでお別れなんだと察して訊ねた。

「別の世界だ。この世界の人間に関わってしまったからな。長居はせぬ方がいい」

「あ……なんか、悪かったな」

責めるような口調ではなかったが、反射的に謝ってしまうのは日本人の悪い癖だ。下手に出て謝罪すれば、大抵の事なら溜飲が下がる。謝れば済むという考えは、美徳などではないだろう。

「よい。たまたま立ち寄っただけで、何か目的があった訳でもないからな」

「旅でもしてるのか？」

俺の問いに「そんなところだ」と答え、彼女は思い出したように俺の方を振り返った。

「せっかくだ。名を聞いてもよいか？」

「え？ ああ、アサトだ。橘 アサト」

「アサトか、不思議と知っているような名だ。私は——と、もう知っておったな」

ヤミヒメと同じ姿の少女が、ほんの少しだけ口元を緩めた。苦笑したのかもしれない。

「まだ答えてもらっていないかった。タチバナ・アサト、お前はこの世界の私と、どういう関係なのだ？」

「どういうって……幼馴染って言っただろ」

「ふむ、ならば訊き方を変えよう。アサトはこの世界の私の事を、どう思っておる？」
「……………」

彼女と出会ってからの俺は妙に察しが良い。彼女はすべて理解しているのだと判ってしまふ。俺とヤミヒメの関係も。俺がヤミヒメをどう思っているのかも。すでに把握している。それでも質問をするのは、俺の言葉で聞きたいからだだろう。そんな事にどんな意味があるのか知らないが。

「俺は——」

知られてしまっているなら隠しても仕方ない。観念して楽になった方がいい。拷問に耐えられる人間などいない。ならば、痛い目に遭う前に素直になった方が利口というものだ。

「……………」

俺の告白に、能面のような顔が赤くなっていく。羞恥の色に染まっていく。気持ちには判らなくもない。目の前にいるのは、表情以外はヤミヒメとまったく同じ少女なのだ。俺も、まるで目の前の少女に向けて言っている気分だった。

……………

気まずいというか、気恥しい沈黙が横たわる。

何だ、このベタなラブコメのワンシーンみたいな状況。況は。

「…………で、ではな。もう会う事もないだろうが」

わざとらしく咳払いをし、彼女はもう一度俺に背を向けた。帽子を被るためだろうが、彼女はヤミヒメのようなポニーテールではなく、項の位置で長い髪を結んでいた。赤いリボンが黒髪に映えるのは、どちらも変わらない。

そんな事を考えながら、俺は彼女を引き留める言葉を探していた。恐らく、本当に二度と会う事はないのだろう。そう思うと、ひどく——

「——なあ」

思わず言葉が口をついて出てしまった。俺はこんなに考えなしかっただらうか？

「？」

彼女はまた振り返り、俺の言葉を待っている。

「あーっと…………」

「…………何だ。もう行くぞ。行ってしまおうぞ？」

心なしか、拗ねたような口調に聞こえる。まだ先ほどの余韻で頬が赤く、見慣れた幼馴染の雰囲気そのままだった。やはり彼女は、カラーコンタクトか何かを付けたヤミヒメ本人なんじゃないだろうか。

まあ、現実逃避はこのくらいにしておこう。



「—何だ、これは？」

「餓別……かな」

家を出る前、押し入れから出てきた黒いブローチ。逆十字の赤い刻印が目を引くが、俺に見覚えはない。なんとなくポケットに入れてきてしまったのだが、ひよつとしたら、彼女に渡すためだったのかもしれない——なんて考えるのは都合が良さすぎるか。

ただ、これはヤミヒメに似合うと思った。ならば当然、彼女にも——

「ふむ。ならば受け取っておこう」

「ああ。きつと似合う」

その一言に、またも彼女の頬が色を変える。少し睨まれた。

「……ヤミヒメ・ファフロウ。私の名だ、覚えておけ」

そう言っつて、羞恥の表情を浮かべたまま、彼女は姿を消した。魔法のように。

今日はハロウィンだ。魔女くらいいいもおかしくない。

そして、魔女なら魔法を使うのも道理だろう。

Mission complete

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『そーりよくせんっ！』九戦目をお届け致します。

看板娘が増えまして。新キャラはやはりプツシュしないと認識されません。その煽り^{あお}を食う形で、最古参であるところのヤミヒメは後回しというか、イラストも去年の四月（サイト二周年記念）以来、一年半ぶりとなってしまいました。

ただまあ、元々は看板娘のヤミヒメを描くつもりだったんですが、せつかくなので三姉妹とも魔女にしたい。そうすれば、後々『ゾイヤみ』のフアフロウ姉妹の未登場の長女に流用出来るじゃない。いつそ、今回の話は『そーりよくせんっ！』の世界に来たヤミヒメ・フアフロウで書けば——と思いつき、今回のお話と相成りました。

そういう意味ではヤミヒメ（看板娘の方）——正直、すまんかった。いやでも、平行世界の同一人物だし、そういう意味では『ゾイヤみ』でやみ子が活躍中な訳だし、ヤミヒメ大忙しじゃない！ やったね！ 憎いぜコンチキショー！

上手い事まとまったところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。『ゾイヤみ』をご覧になっていない方には、何がなんだかだと思えますが、よろしければこれを機会に目を通していただけると嬉しいです。『そーりよくせんっ！』を楽しんでいただけているなら、きっと、多分、恐らく、大丈夫だと思います……！

さて、次のイラストは正月。誰にしますかね。

2017 / 10 / 18 流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりよくせんっ！』ページに戻る